

北魏洛陽城永寧寺址の調査

当研究所では、中国社会科学院考古研究所と共同で日中都城の比較研究をすすめている。その一環として、同研究所洛陽漢魏城隊による北魏洛陽城内永寧寺址の発掘調査に、調査員3名（浅川滋男・玉田芳英・次山淳）を派遣した。期間は1994年10月20日から12月18日である。

永寧寺は、孝明帝熙平元年（516）に靈太后胡氏により建立された北魏洛陽最大の仏教寺院である。孝武帝永熙3年（534）、九層浮図として威容を誇った木塔が焼亡し、鄴城への遷都に伴い放棄された。

1963年のボーリング調査によって、東西215m、南北305mの築地に囲まれた範囲に、大殿・塔・南門を南北に配し、塔に正対して東西の門が開く伽藍配置であったことが判明し、1979年以降、塔・南門などの発掘調査が継続的におこなわれている。今回の調査では、塔基壇の西南・東南隅および西面、塔南方に小規模な調査区を設けるとともに、西門については全面調査をおこなった。

塔周辺の調査区では、過去の調査同様に、崩壊土のなかから塑像・鉄製仏具・風鐸片・石製螭首・瓦類・日干し煉瓦などが出土した。日干し煉瓦のなかには、表面が融解してガラス化しているものもあり、3ヶ月にわたり燃え続けたと伝えられる火災のすさまじさを目の当たりにすることとなった。

西門は、後世の擾乱が著しく不明な点も多いが、基壇掘り込み地業のプランは、東辺約30m、西辺約24m、東西18.4mの凸字形を呈し、西辺築地の外側に約1.5m張り出している（下図）。礎石は、原位置から離れたものが1点遺存していたのみであったが、根石代わりの青砂を敷いた据付穴の位置関係から、南門と同様、桁行き7間、梁行き2間の3本の門道をもつ門であったものと推定される。桁行きの柱間は3.9m、梁行きの柱間は内側が6.8m、外側が5.5mとなる。

西辺築地は、深さ1.5mの掘り込み地業の上に、幅1.2～1.3mの版築で形成され、表面に白土を塗り、一部に赤彩の痕跡を残していた。遺物としては、鵝尾を含む瓦類、煉瓦などの建築材料が出土しており、基壇南辺からは、埋納された多量の小玉類がみつまっている。

今回の調査によって、永寧寺の建物構造に新たな知見を加えるとともに、著名な塑像群の内容がさらに豊かなものとなった。こうした成果に加えて、中国側研究者との間で、調査技術、遺構・層位の認識等についての意見交換が日常的におこなわれたことは有意義なことであった。なお、本調査の概要については、「北魏洛陽永寧寺西門遺址発掘紀要」（『考古』1995年8期）に紹介されている。

（玉田芳英・次山 淳）

北魏洛陽城永寧寺址出土塑像・瓦当 撮影 井上直夫